

◆特集◆ 地域を支え、未来へつなぐ医療のかたち ~JCHO秋田病院 院長に聞く~

JCHO秋田病院は、社会保険庁の解体による、秋田社会保険病院存続の危機を乗り越え、平成26年からその歩みを始めました。

名称変更から11年、旧民生病院の開院からは、今年で創立80周年を迎えます。これまで地域医療の中核として、安全・安心で質の高い医療と介護の提供に取り組んできました。今回は、院長の大塚博徳先生（以下、院長）にお話を伺いました。

●医療業界の現状と課題

問 現在の医療の諸問題をどのように考えていますか。

院長 今、医療業界は完全に「不景気」です。物価や人件費が高騰する一方で、診療報酬は上がらず、従来の診療体制では採算が合いません。医療の質が高くて、その努力が報酬に反映されにくい構造に問題があります。

また、全国的に多くの職種で人手不足が深刻化する中、医療界においても医師や看護師をはじめ、コメディカルスタッフの人材確保が大きな課題となっています。

病院の赤字が拡大し、公立病院の経営も厳しい状況が続いています。これは病院単体の問題ではなく、地域全体の構造的課題です。

●地域医療構想と連携の進展

問 能代市における病院連携の現状を教えてください。

院長 能代市には3つの基幹病院がありますが、それぞれが単独で成り立つ時代ではありません。院長同士で密に連携し、定期的に意見交換を重ねています。病院の母体は異なりますが、「自分の病院だけ守ればよい」という考えを超え、「地域をどう守るか」という視点で連携を進めています。

秋田県内でも、能代の連携は特に進んでおり、住民に対しても「病院がなくなるのではなく、連携することで守られるのだ」という

メッセージをしっかりと届けていきたいと考えています。

●医療・介護人材と地域の未来

問 地域の人材確保と教育の関係性についてお聞かせください。

院長 能代市では、医療・介護分野の従事者が約4000人と、就業人口の中で最も多い比率を占めています。これは大きな地域の財産です。人口減少が続く中でも、医療・介護の担い手を地元で育て、定着させていくことが地域の安心につながります。



インタビューに応じていただいた大塚博徳先生 (提供：JCHO秋田病院)

中高一貫校の整備や学校再編、さらに職業専門大学の導入など、教育改革も地域の未来に直結します。医療人材だけでなく、地域産業に即した実践的な人材を育成する必要があります。

●病院統合とまちづくりの構想

問 病院再編の動きとその意義についてお聞かせください。

院長 今後、病院を再編・統合していく方向性は避けられないと考えています。1+1+1が3ではなく、5にも6にもなるような相乗効果を目指し、体力のある今だからこそ前

向きな議論を進めたいです。

病院を新たに建設する際には、市と連携して、病院名や運営形態を柔軟に検討する必要があります。固定資産税の減免や支援制度も含めて、行政の後押しが不可欠です。「自分が80歳になったときに入る病院を、今のうちに自分たちでつくっておく」という意識で臨んでいます。

●医療を超えた地域づくりへ

問 医療がまちづくりに果たす役割をどのようにお考えですか。

院長 医療は地域の基盤です。独り暮らしの高齢者が増える中で、行政や民生委員との連携によって、地域の安全網をどう築くかが問われています。

医療提供体制を支えるためには、地域住民の理解と参加も欠かせません。職員や住民に、構想の方向性をしっかりと伝えることが院長の責任であり、地元出身者としての私の使命だと考えています。

●今後の展望とアクション

問 今後の取組について教えてください。

院長 今、3病院連携によるシンポジウムや公開討論会の開催を通じて、現場の意識統一と地域への情報発信を強化したいと思っています。教育や産業振興も含めた「地域まるごと医療構想」を描き、持続可能な社会を築いていくための一歩を着実に進めていきたいと考えています。

取材を終えて

「病院の未来は地域の未来と直結している」取材を通じて、そう強く感じました。大塚院長の言葉には、現場を知る者としての重みと、地域への真摯な思いが詰まっていました。

取材：菊地時子、畠 貞一郎